

統合失調症を抱える被補助人の支援について ～心理社会的アプローチの実践～

飛澤 友香利（みやこ西部地域包括支援センター）岩手県社会福祉士会（61352）

I. 研究目的

成年後見制度は高齢者や家族の判断に任せることが適切でない場合に市町村責任で専門的判断により社会的な支援を行うための制度である。しかし、実際には、被補助人本人が制度の理解ができず、審判取消要求が高く、自分のお金を自由に使えないと訴える事例がある。

本研究では、成年後見制度の枠組みの中でクライアントが、「尊厳ある暮らし」の実現や自らの価値観や幸福度の自己決定ができているのかを明らかにする。

II. 研究方法

本研究では、成年後見制度に対する拒否が強い事例における被補助人の支援を事例研究方法により分析した。そして、次の①から④の順で被補助人を理解することを進めた。

- ① この事例を心理社会的アプローチ（ホリス・状況の中の人）に基づき、今までのクライアントとの面接を振り返り、クライアントの心理について理解を深める。
- ② クライアントの生活状況・親子関係・生育歴から今までの行動と言動を振り返る。
- ③ クライアントが問題行動を起こさず、自分らしい生活を続けるためにはどうしたらよいかを考察する。
- ④ クライアントに対してどのような関わりが必要なのか理論性・感情面・行動面で検討する。

III. 倫理的配慮

事例に関するデータの管理は、十分な秘密保持の配慮を行った。また、事例の使用あつては、公益社団法人日本社会福祉士会の事例を取り扱う際のガイドラインに基づき、事例の内容について、その本質や分析の焦点が損なわれない範囲において特定の事例として判別できないように大幅に修正もしくは改変し、個人が特定されないよう配慮した。

IV. 事例

クライアント：母（被補助人）（80歳）と息子（50歳）の2人暮らし。母と息子共に統合失調症で、母（被補助人）は、軽度の知的障がいもある。口喧嘩が絶えず、5年ほど前には警察沙汰となり、母（被補助人）が鑑定のため保護入院になったことがある。息子は金銭管理ができず、家賃や光熱費が滞ることが多い。

- ① インテークから現在までの面接を振り返る（直接的処遇）

- ・ 保護入院から退院後、自宅で包括の初回訪問。（補助人・行政と同行）

本人、静かにゆっくりと話す。補助人の説明や今後の包括の定期訪問を了承する。

- ・ 包括では1～2か月に1回程度、状況把握の訪問をするが、本人は憤慨しているか訪問拒否のため、話ができない状態が続く。関係機関（行政・裁判所等）に頻回に出向き、不満をぶつける。
- ・ 行政の担当者と同行訪問し、2時間ほど本人の今までの経過を傾聴する。
- ・ 包括のことを覚えていただき、包括に話を聞いてほしいと電話が頻回にくるようになる。

（電話では時間を決めて対応。訪問は、1～2か月に1回程度の訪問とし、依存度が高くならないよう考慮。）

- ・息子は、就職と退職を繰り返しており、本人の訪問時、自宅で何度か面談し、息子の状況把握を行う。

- ・本人の不安なことは、補助人や関係機関に確認し、不安解消に努めながら、信頼関係を構築。

② 「支援対象世帯の状況」

生育歴は、被補助人は、女は学歴が必要ないということで学校に通わせてもらえず、幼いころから農家の手伝いをしてきた。兄弟が多く、貧しい中で育った

親子関係は、長女と次女はそれぞれ家庭を持ち、長女の孫の世話をしたり、次女の引っ越しを手伝ったりしていたが、長女と次女と縁を切ったと話され、最近では、長女と次女の話をしなくなった。長男は、ギャンブルで借金を繰り返し、金銭管理ができず、仕事に就いてもすぐに辞めてしまうため、常に困窮状態が続いている。被補助人は、口では長男にお金を渡さないと話すが、長男にお金をせびられると自分の年金を渡してしまう。

生活状況は、結婚後、金銭的な援助が夫から得られない中で加工場で肉体労働をしながら3人の子供を育てた。子供3人が結婚や就職で自立したが、長男が就職後、統合失調症になり、入院治療をさせ、在宅生活することができるようになった。夫と離婚後は、長男と二人暮らし。長男とのトラブルで警察沙汰になり被補助人は、保護入院となる。長男から年金を搾取されていたことと本人の判断能力に課題があったため、成年後見制度の利用に至っている。被補助人は制度について理解できず、関係機関に対して審判取消要求を強く訴えつづけている。

V. 考察

地域包括支援センターが介入後、心理社会的アプローチを実践することで信頼関係の構築を行い、今までの経過を話している中でクライアントが自ら現在の置かれている状況とその背景に気づき、自分の考えを言語化することができてきている。今後、課題を解決していくために今までとは違う形で行動できる可能性がみえてきている。

VI. 結論

心理社会的アプローチが有効である。

理論的には、ワーカーのかかわりによりクライアントは支えられていると感じ、ワーカーの力を借りながら自らの置かれている状況を見直していく過程をたどる。感情面において、統合失調症は、幻覚・妄想により周囲への不安感が強くなることが多いので、環境や接し方が重要であるため、思うようにいかない息子との関係や今後について傾聴とカタルシスを実践しながら、クライアント本人がストレスをため込まず、安心して穏やかに生活できるよう継続して寄り添った支援が必要となる。

行動面では、家族・置かれている環境・関係機関との現状についてクライアントと一緒に考え、具体的な行動についてワーカーとして提案していく。時間と忍耐が必要だが、クライアントが「尊厳ある暮らし」と幸福感の実感が得られるよう努める。

参考文献

公益社団法人 日本社会福祉士会 「基礎研修テキスト上巻」